

(4) 「SAJ スキーテキスト」

全日本スキー連盟編、朋文堂
昭和36年刊、定価320円。
自慢ではないが学生の頃はスキーが上手かった。しかし、卒業以来、一回も履いたことがない。いつだったか相棒が冬山に持参したスキーを試みに履いてみたが、滑って滑って歩くことさえできない体たらくであった。

学生の頃は大学のヒュッテが伯耆大山にあって、登山もしたが、スキーにも通ったものだった。

背中に PATROL と書かれたアノラックを着用し、混雑するゲレンデをスラロームで優雅に滑って来て、ゲレンデで立ち止まっているアベックの前に横滑りでピタッと止まり、「こんな所に立ち止まってはイケマセン」などと注意している格好良いパトロールが羨ましくてならず、一度はパトロールなるモノをやってみたかったものだった。パトロールにはスキー指導員の資格が必要だった。

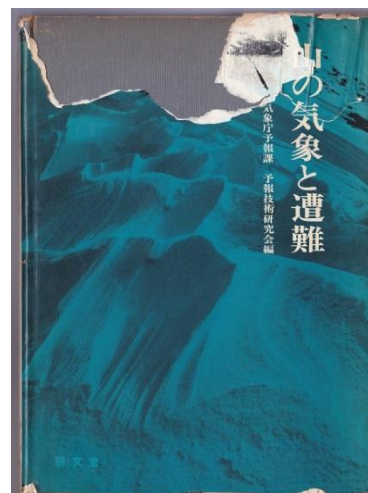
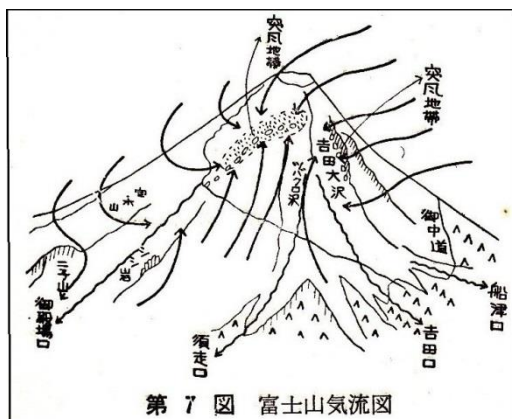
このテキストは、スキー指導員資格取得を目指す人のバイブルでもあった。当時のスキー指導員は確か25歳以上でないと受験資格が無かったが、その下に準指導員という制度があって、これは22歳以上であれば受けられたので受験してみたが、試験と名が付くモノには何事であれ“滑る”ことが得意な私は、スキーでも“滑る”技術が優れていたのだった。もっとも、実地試験の判定員は大抵は地元旅館組合などの人だったから、関係者の子弟などの受験者に下駄を履かせたのかもしれない、また、生まれた時から下駄代わりにスキーを履いていた雪国の若者に勝てる筈もなかった。

序のことに、上右の写真はこの本の口絵に載っている「ゲレンデ・シュプリングェン」(小ジャンプ)で、往時のスキーの様子が偲ばれる。



(5) 「山の気象と遭難」

気象庁予報課編、朋文堂、
昭和35年刊、定価500円。
山の気象の本は観天望気などは多少はあったが、遭難発生時の山の天気と気圧配置などの気象データの関係を分析して書かれた本は他には無かった。山好きの現

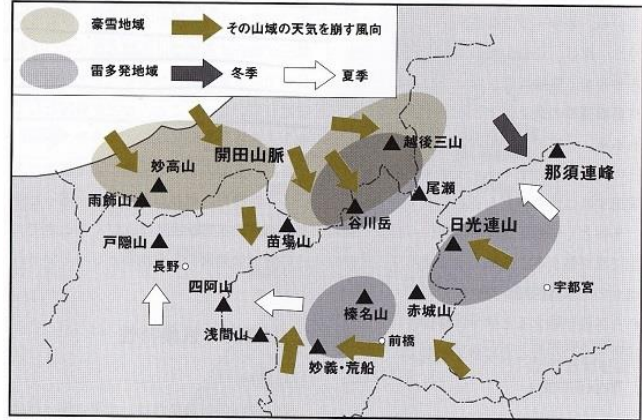


役の気象庁予報官が書いたものだけに理論的にしっかりしたもので、大いに勉強のし甲斐があった。

高層気象データも充分ではなく、また気象衛星画像なども無かった当時に、これだけのことが書けるのは流石気象庁予報官ではある。山の気象については、気象だけでなく登山にも該当山域の地理にも詳しくないと書けないので、山の技術書の部類では気象の本は極端に少ない。この間の事情は今でも同様で、しっかりした気象理論に基づいて書かれている本は、猪熊隆之著「山岳気象大全」(2011年刊、山と溪谷社)、村山貢司他著「山岳気象入門」(2006年刊、同)くらいなものであるが、前者の方が山岳気象には特化している。山域別の山岳気象も詳述されている。



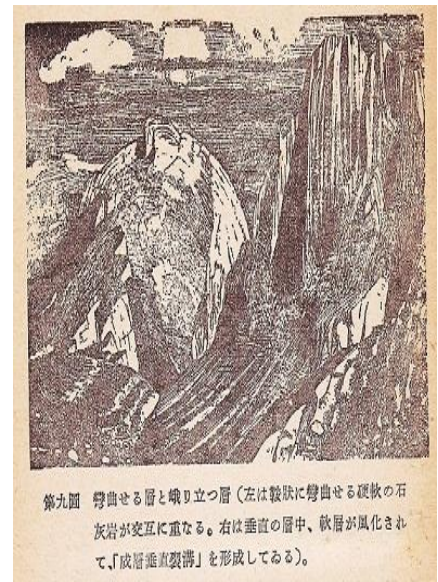
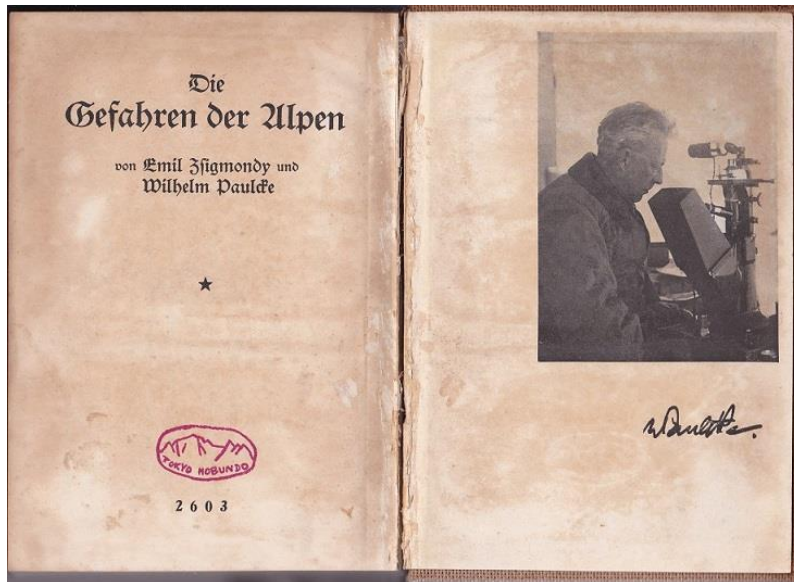
図11. 上信越、北関東の山岳気象



(6) 「山の危険」

シグモンディ&パウルケ著、松井博訳、昭和17年刊、朋文堂、定価3圓。

この本はヨーロッパアルプスにおける登山の危険について書かれたものである。古い文献でもあるし登山環境も日本と異なっているので、登山技術自体を勉強するというよりも登山先進国のヨーロッパではどのような考え方をしているのかを知りたいという興味から読んだものだった。古本屋で買ったが、「神戸高商山岳部」のゴム印が押しあてられていた。表紙は荒織の布装、用紙はザラ紙で往時が偲ばれるが、太平洋戦争の非常時のさなかによくこのような無用本が出版できたものと感心せざるを得ない。



(4) Mountaineering The Freedom of the Hills

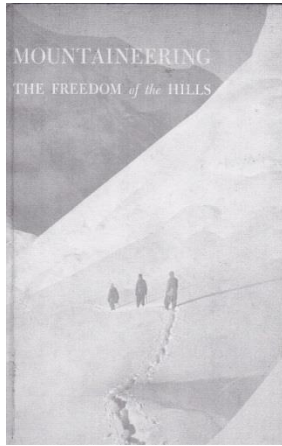
米国 Muntaineers Books 発行、第1版1960年刊、定価不詳。最新版は第8版2010年刊、\$29.⁹⁵ U.S. 50年間にわたって世界的な登山技術教科書のバイブルと言われてきたテキストである。第1版でも425頁の大冊で、ハイキングから岩、雪、氷、氷河、高所・極地まで、登山の概念・考え方、技術、露営、用具、安全の確保、山岳環境保全までオールラウンドに編集・記載されたものである。

全編アメリカ式の合理的な思想で貫かれているので、例えば日本では“山男の魂”と言われて大事にされてきたピッケルの用途でも、野原でのトイレの穴掘りにもピッケルを使えなどと書いてあるので、ちょっと我々の感覚と異なるところもあるが、全体的に非常によく纏った本で、世界のバイブルと言われるだけのことはある。当時、どのようにしてこの本を手に入れて読んだのか記憶が定かではないが、辞書と格闘しながら読んだ記憶がある。

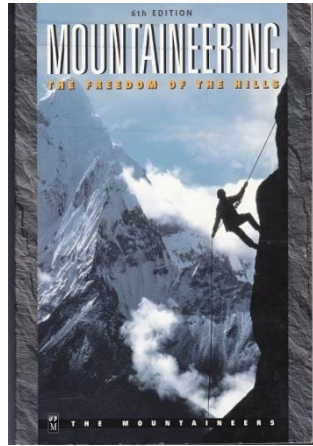
会社でもそろそろ窓際に追いやられるようになってきて、それでは山でも再開してみるかと思って、またこの本の第6版(1997年刊)を買ってみた。爾来、第7版(2003年刊)、第8版(2010年刊)も読んだが、各版発行間隔のたった10年間足らずの間に用具や技術の進歩が著しく、図版なども最新版に

差し替えられていて、登山技術の変遷を垣間見るようで興味深い。私事にわたって恐縮であるが、このようなオールラウンドな技術書は日本には無いので翻訳出版したらどうだろうか、と、翻訳原稿を旧知の某出版社の編集部長に持ち込んだところ、「ページ数 700 ページにも及ぶ山の技術書が果たして何部売れるとお考え？ 翻訳料はロハにして貰ったとしても、原著者著作権料・翻訳出版権料等々も支払う必要もあり、1冊 10 万円で売ってもペイしないヨ。そんな高価な本、買う馬鹿はいないネ。せいぜい 10 冊も売れば御の字だ。真ッ赤赤の赤！」と軽くイナされてしまった。全く・・・。

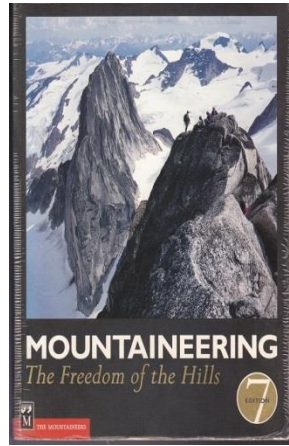
書影だけでもそれぞれの年代の登り方などの変遷が分かるので、下に書影を掲げておきたい。



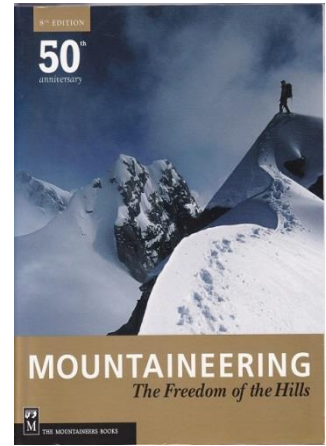
(初版、1960 年)



(第 6 版、1997 年)



(第 7 版、2003 年)



(第 8 版、2010 年)

また、50 年前の墜落停止の練習方法がどのようなものであったか、初版から下に引用しておく。

当時は確保器などというものは無かったので、今では過去の遺物となってしまう腰絡み法が使われているが、練習システム自体は今も変わっていないことが興味深い。

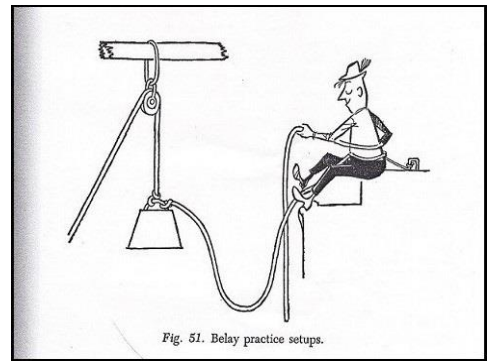
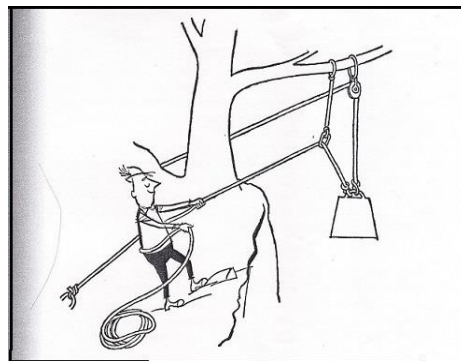


Fig. 51. Belay practice setups.

今回で「山の道具、今昔」の連載を終了します。ご愛読ありがとうございました。(おおつか)